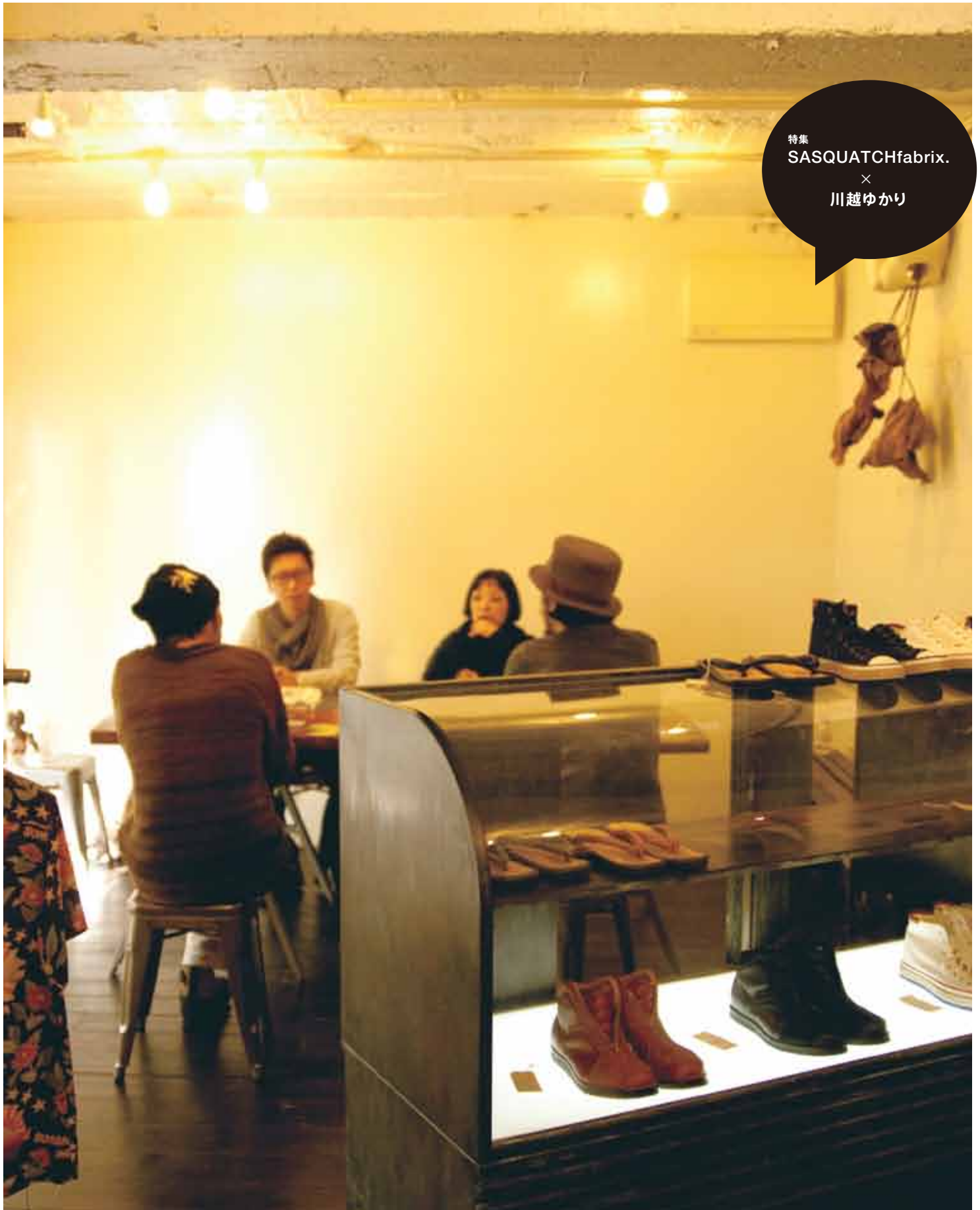


NID News

Latest News
Nagaoka Institute of Design

January 2012 Vol. **011**



特集
SASQUATCHfabrix.
×
川越ゆかり



SASQUATCHfabrix. × 川越 ゆかり

川越(以下K) :「こういうこと聞け」っていうリストを渡されてるので(笑)これに沿ってどんどん聞いていきますので、よろしくお願いします。ではさっそく。このサスクワッチファブリックスというブランドはどれくらい前に立ち上げられたんですか？

横山(以下Y) :そうですね、今から9年か10年くらい前ですかね。

K :お二人はWonder Worker Guerrilla Bandというアーティスト名義も持っているそうですが、始まりはこっちが先？

荒木(以下A) :最初は洋服だけじゃ食べていけないと思って、洋服の他にいろいろなデザイン仕事をもらってきていて。そのときから使っているのがこの名義です。

K :今も活動を続けているんですよね？

Y :外注で洋服つくったりするときに使っています。

K :私が持ってるお二人の情報は、実は長谷川君からの情報なんです(笑)

長谷川(以下H) :ぼくは中学2年の頃からずっとサスクワッチファブリックスのファンなんです。メキシカンスタイルのTシャツで出会ったのが始まりだったんですが、今はMODERN NINJAっていうテーマを展開していますよね。あれから今回のテーマへどんどん進化していったと思うんですが、どういうふうに変え方が変わったんですか？

Y :考え方は何も変わってないです。ただテーマが違うだけ。時代が変わっていく中で、自分たちのスタンスは変わらないですけど、

その時代時代に合わせてるっていうことです。

K :基本ファッションってそうですね。

Y :時代とともにある、というか。

そこがなかったらもうファッションじゃないと思います。

K :ファッションは日常に溶け込んでいるもので、デザイナーはファッションを通じて自分たちが考えるライフスタイルを提案する。そしてその考えに“ハマって”くれた人が着てくれる。と思うんだけど、お二人はどう思う？

A :そう思います。でもブランドを成り立たせていくためには、“ハマて”いかなきゃならないというか。クリエイションとは関係ない部分で頭を使うのが難しいですよ。

K :実は私もそこが一番苦手なんです！

A :そこで悩んで、抜け出られない人もいっぱいいますよね。

K :提案をどう進化させていくか、っていうことはずっと続いていくことだよ。学生たちには授業の中であえて進化ということを考えさせて、ポジショニングマップも作らせています。ブランドコンセプトって本当は頭の中に置いておくものだから、そんなに言ったりするものじゃないけど、でもカタチで表さないと人に伝わらない部分もあるから。

Y :そうですね。コンセプトって、そのブランドをずっと追っていないとなかなか人には分からないじゃないですか。でもつくるために必要だから、自分たちの中でコンセプトを立てるだけの話で。それよりはつくったも

のがおしゃれとか、キレイとか、カッコいいとか、それが一番重要だと思いますね。

K :長谷川君分かった？ここで授業やってどうすんだってね(笑)

K :大学の思い出とかありますか？

Y :NIDがいいなって思ったのは、学校がまずカッコよかった。家具もデザイン家具を集めてあるじゃないですか。だからファッションとして選んだっていうのもありますね。あと、何だろう。とにかく「ものをつくっていいよ」っていう環境がよかったですね。ものづくりの専門大学だからみんながものをつくろうとして来てるじゃないですか。だから「あっ、つくっていいんだ」みたいな。それってある意味特殊ですよ。普通の高校だと、美術部に入ってる人たちなんかやっていて、ものをカタチにするっていうことがちょっと変わってる人みたいに見られたりとか。

K :確かに×2

Y :でもNIDだとそういう人たちがたくさんいるので、そこが一番大きいと思いますね。「ステッカーとか、みんなつくるんだねえ」「マックとか、みんなやるんだねえ」みたいな(笑)

H :ぼくもそう思います。同じ思いの人たちが同じ空間に集まって、「あっ、やっていいんだ」っていう軽い気持ちで始められて、そこからみんなが繋がって盛り上げてくれて。



荒木 克記 (アラキ カツキ) /写真左
三重県出身。1996年入学。
在学中はテキスタイルデザインを専攻

横山 大介 (ヨコヤマ ダイスケ) /写真右
新潟県出身。1996年入学。
在学中は空間デザインを専攻

卒業して3年間ほど、荒木はアパレル会社で、横山はグラフィックデザイナーとしてそれぞれキャリアを積んだ後、東京にて再会を果たす。

2003年にアパレルブランドSASQUATCHfabrix.を立ち上げ、グラフィックやアート、音楽などのカルチャーと、ファッションをミックスさせたアイテムを送り出し続けている。

また、アーティスト名義であるWonder Worker Guerrilla Bandとしても幅広い活動が続ける。



Y: ファッションを大学で教えるのって正直難しそうだなって思うんですけど、最終的にはファッションデザイナーを生み出すことを目指すんですよね？

K: デザイナーはもちろんだけど、スタイリストもプレスも、ファッションに関係する全部を見て、自分の道を見つけて欲しいと思いますね。

Y: 卒業生ってどんなところに勤めてるんですか？

K: コースとしては長谷川君たちが1期生になるんだけど、イタリアでデザイナーやったり人やシューズデザイナーをやってる卒業生もいるし、ファッション関係で勤めてる人もたくさんいますよね。

Y: ファッションに携わってるって言っても、実は9割ぐらいがアパレル会社勤務だったりしますよね。ぼくらは今こういうとんがった場所にいるけど、でもアパレル業界で言えば実はごくわずかな人口であって。ほんとのアパレルの社会ってたぶん学生たちが想像しているのと違うっていうか。でも学生が見て目指してるってところってぼくらの場所だったりするじゃないですか。大学としてはそのギャップをもっと教えてあげるべきだと思いますね。

K: そうだね。最初は地道にちくちく縫ってんのが仕事なんだよね。

Y: そういう地道なのが仕事であって、もちろんそれが出来ないともっと上のことは出来ないんだけど、そういう仕事の内容を知らな

い人がいっぱいいるんですよ。でももっと上のことをほんとにやりたいんだったら、そこに行くためにがんばるべきだし。

でも意外と地道なところでいって人もいるんだよね…。

K: どういう環境に身を置くことが自分が自分らしくいれるのか、やっぱり考えなきゃいけないのは学生の時期だと思うのね。

まあそれでも社会にでてみるとそれなりのギャップはあるんだけど、「あれ、思ってたのと違うぞ」って思っても目指していることがあれば人間はどんどん進化していけるものだから。地道な時期を、ステップアップする踏み台にすることが大切で。私が教えてることの基本はそこなんだよね。

Y: ほんとに難しいですよね。アバンギャルドなことを言いすぎても違うじゃないですか、大学って。

K: 私はけっこう言っちゃってるかも(笑)

Y: 自分の芯とか真ん中な部分を教えなきゃいけない。そこが難しいですよね。

K: 難しいけど芯は持たないと、次のステップはないよね。

お二人のアトリエにはパタンナーとかいるんですか？

A: パターンは外注してますね。外注するとデザイナーとしてパタンナーと話せますよね。「パターンのことは任せた！」という気持ちがあるので、結構難しいこともかなり大胆に言っちゃってます。

K: そういうの困るんだよね～(笑)



A: でもそれが発展にも繋がるんですよ。

Y: 大切なのは「これつくりたい」っていう気持ちだと思います。頭の中にあるものを100%表現できた人が最後に勝つというか。大学では出来あがるまでのプロセスも大切な評価になるけど、社会は最後の完成品を見るじゃないですか。「自分はこれだけ徹夜してパターンも引いて、全部縫ったんだよ！」って言っても、「へえー」ですよ(笑)

K: 努力は金額の差にならないし、お客さんにとっては関係ないからね。

Y: まずおもしろいものを考えて、そのゴールに行くために自分に足りないところは助けてもらおうというか。自分の思いが伝わる専門職の人たちに助けてもらったほうがすごく完成度は高くなりますよね。このステンドグラス(上の写真)も、そういう人がいなければ恐らくつくってないですね。

A: どこをゴールにするかだと思います。どんどんプロダクトを生み出して行きたい人は全部やってたら間に合わないから、自分の理想に。だから餅は餅屋に任せる。

K: 学生にはそこらへんのことはまだ判断つかないかな。

A: 自分がどうなりたいたかがわからないっていうのもありますよね。

Y: だから、授業課題はやったほうがいいってことですよ(笑)

K: ありがとう!ちゃんとオチがあったね(笑)



川越 ゆかり (カワゴエ ユカリ)
衣装デザイナー
ファッションプロダクトデザインコース
准教授
サザンオールスターズなどのアーティスト衣装から、映画や舞台、広告、TVCMまで、幅広いジャンルで衣装デザインを手がける。その活動は国内に留まらず海外にもおよび。



長谷川 豪也 (ハセガワ ヒデア)
ファッションプロダクトデザインコース
3年(東京学館新潟高等学校出身)



Y: 学生がお店やったらおもしろいですよね。

H: 「何でもやった者勝ちだ」とはよく言われますけど…。

K: 学生も結構忙しいのよ。

Y: 課題とか無視すればヒマでしょ？(笑)

K: それはダメ。立場的にそんなことやれとは言えないけど、ほんとはそれぐらいの勢いがあってもいいと思うのね。でも課題はしっかりやりましょう。

H: 一人でやるのは難しいと思いますけど、仲間を募ってやってみたいですね。

Y: ものをつくって売れる場所があるって、それって一番のゴールだと思います。ものをつくって、それを売って、お金をもらう。すごくシンプルだけど、それが全てだと思います。そういうリアルな場所があれば一番おもしろいというか、やる気がでますよね。

K: 自分のつくったものが売れたらやっぱり嬉しいものね。

Y: ぼくらでも単純に、つくったものを街で着てる人を見ると嬉しいですね。そこがゴールだから。でも意外とそこが見えてない人っていっぱいいるんですよね。つくって出来て、出したらそれで終わり、みたいな。結構仕事になるとそういう感じになってしまう人が多いですね。

K: 最終的に目指すところがどこか、だよな。「出すこと」が好きって人もいるしね。

でも私はもったいないと思うなあ。

Y: そこが楽しさだと思うんですけどね。

K: 「楽しい」って思えることって大切だよな。学校もね、ある意味楽しいところじゃなきゃいけないんだよ。

Y: 特にNIDってそういうところじゃないと。

K: ものづくりってそうだよな。自分が楽しんでつくってなかったらさ、人も楽しいと思うわけないんだから。

Y: 「イケてる」「イケてない」っていうジャッジをさせる。大学ってたぶんそういうところですよな。

K: 私の基本理念かもしれないなあ。

K: 今後の活動で、具体的にはどんなことをやっていきたいですか？

Y: 今って洋服にしてもいろんな物事に関しても、結構閉塞感みたいなものがあるじゃないですか。

K: ん〜、時代が時代だからってことかな。

Y: そういう「時代が時代だから」っていうものをちょっと変えたいですね。やっぱりものをつくってる以上、なんか思い切ったことをやりたいですね。そして、ファッションの新しい道とかやり方を見つける。あと、「洋服ってほんとおもしろいものだよ」っていうことをバトンタッチできたらいいかなあって思います。服って、カッコいいものであったりカッコつけたりするものが本質じゃないですか。

K: そうだよな。「モテたい」とかね。ちなみに展示会は年に何回ぐらいやってるの？

Y: 2回ですかね。

A: 「EOTOTO」っていうのも展開してるんですよ。あと BEAMS とかと一緒にやらせてもらってるブランドもあって。結構量はいっぱいつくってますね。

K: 女性ものはつくってないの？

Y: ISETAN 限定で女性ものをやったりしてます。

K: 私はサザンオールスターズとかタレントとの仕事が多かったんだけど、お二人はコラボレーションしてたり提携しているようなタレントはいないの？

A: 提携しているというか、まあよく使ってもらっているのは瑛太さんとか…。あと EXILE とかジャニーズの人たちにはよく使ってもらってますねえ。

Y: 「なんで？」って思うよね。

K: それってスタイリストさんが来るんじゃ

なくて本人たちが来るの？

Y: 本人たちが来ますね。でも仕事となると基本的にスタイリストさんとのやりとりなので、直接コラボというのはないですかね。

K: まあでもタレントの誰が着ようと関係ないよね。お二人があまりそういうことを望んでいないというのもあると思うけど。

Y: そうですね。自分たちがどう楽しく生きるか、ですね(笑)

大変なこともありますけど、楽しいって思えてやれているからやっているだけであって。これが楽しくなかったら続けないですね。

A: ファッションって何でもやれるんですよ。音楽関係の人たちとも仕事できるし。

Y: 今回もちょうちん(上の写真)をつくったんですけど、ちょうちんもファッションアイテムとして商品になりますし、ほんとに何でもアリですね。

K: 何をアイテムとしてつくるかっていうのも、先見の明が必要だし常にアンテナを張ってないといけませんよね。それに人の繋がりがあってこそですよな。

Y: そうですね。始めたばかりの時は、例えば今でこそスターになってる人たちが中目黒あたりで普通にみんなスケボーしたりしてて、ぼくらも一緒によく遊ばしてもらっていたんです。

A: そういう人たちには自分たちのビジョンを見てもらえて、「いいじゃん、それイケてるね」なんて言って協力してくれるんですよ。でも自分が何をやりたいのか自分でわかってないと、誰も助けてくれないですよな。

Y: 「オレ、これです」っていう自分の軸みたいなものをNIDで学んでことだよな(笑)

K: うまくまとめてくれてありがとう(笑)



2011 SPRING & SUMMER COLLECTION
"ZENARCHY"



MODERN NINJA
(2011-2012 AUTUMN & WINTER)



2009 AUTUMN & WINTER COLLECTION
"TOKYO AIR RUNNERS"

MODERN NINJA
(2011-2012 AUTUMN & WINTER)



2011 SPRING & SUMMER COLLECTION
"ZENARCHY"



The Inoue Brothers x Sasquatchfabrix.





卒業生が立ち上げた
プロジェクト。

鯛車復活プロジェクト ティファニー財団賞伝統文化振興賞 受賞!!

鯛車復活プロジェクトの代表を務める卒業生の野口基幸さん。

このたび、その鯛車復活プロジェクトがティファニー財団賞伝統文化振興賞を受賞しました。野口さんが行ってきた活動や地元への想いなどをご紹介します。



水と土の芸術祭(2009)にて新潟市美術館でのインスタレーション
撮影/中村脩

野口 基幸 (ノグチ モトユキ)

鯛車復活プロジェクト代表

1981年新潟市巻地区生まれ。在学中は視覚デザインを専攻。2004年、15年前に途絶えた新潟市巻地区(旧巻町)の郷土玩具「鯛車」を復活させる。

その後、長岡造形大学研究員となり、鯛車の研究を続けながら「鯛車復活プロジェクト」を立ち上げ、ワークショップやインスタレーションなど伝統行事の復活を手がける。

■ 鯛車とは

「鯛車」とは新潟市巻地区(旧巻町)に江戸時代末期から伝わる郷土玩具です。お盆の夕暮れ時になると中にあかりを灯して、浴衣姿の子どもたちが下駄を履き町内をゴロゴロと引いて歩きました。しかし、昭和30年代まで盛んに行われてきたこの風習は、時代の変化とともにいつしか町から姿を消してしまいました。



お盆のお墓参り

■ 鯛車との出会い

私と鯛車の出会いは小学校2年生の時の地元のお祭りです。自分の背丈の倍以上もある鯛車を引いたのがきっかけでした。その後、町で唯一鯛車を専門に作っていた職人さんが亡くなると鯛車は町から姿を消してしまいました。私は大人になっても鯛車を引いて歩いたことが記憶の片隅にずっとあり、大学4年生の卒業制作になんとか鯛車をテーマに選びました。色々と鯛車を調べて行くうちに私のひいおじいさんが竹細工の職人だったことが判明し、鯛車の材料である竹ひごづくりの道具が全て揃っていました。また亡くなった職人さんのお宅にお邪魔すると偶然にも職人さんの命日であったりして運命的なものを感じました。ただ、その時は今のように鯛車の活動を続けて行くとは思っていませんでした。



■ 地元への想い

大学に入学した時、卒業したら都内で就職し活躍する夢ばかりを描いていました。しかし卒業制作で鯛車と出会い、今まで当たり前で過ぎてきた地元の良さを発見することができ、地元に残ることを決めました。町ですれ違う人同士が当たり前にあいさつを交わす姿、私の町ではこんな小さな幸せをたくさん見つけることができます。今では、同じ志を持った仲間と一緒に活動できることがとても幸せです。これからも鯛車づくりを通して人と人をつなぎ、鯛車が当たり前にある風景をつくるのが私の使命だと思っています。



ティファニー財団賞授賞式

■ 鯛車復活プロジェクトについて

卒業制作で鯛車を完成させ、卒業後すぐの2004年の巻夏祭りで鯛車を10台作り地元の子どもたちとパレードをしたところ、とても反響がありました。年配の方は懐かしいと感じてくれたようですし、鯛車を笑顔で引く子どもたちの姿を見て自分の小さい頃の記憶と重なりました。このままでは終われない、もしかしたら作り手を増やせば町から鯛車がなくなることはないのではないか

と思い「鯛車復活プロジェクト」を立ち上げました。公民館や小学校で鯛車の制作教室を開催し、お盆には町なかで鯛車の展示やお墓参り用に鯛車の貸し出しを始めました。私たちのプロジェクトの夢は、昔当たり前だったお盆の情景を復活し、鯛車のあかりで町中を真っ赤に染めること。そして、鯛車を通じて町の人と人がつながり、心豊かな暮らしを取り戻すことです。

■ 鯛車教室について

鯛車教室は1年に地元の公民館で春と秋に2回、東京表参道で春に1回、地元小学校の夏休みに1回行っています。鯛車を1台作るには24時間（3時間を連続8回）かかります。見た目は簡単そうですが、竹を曲げたり和紙を洋服の型を作るように細かく貼っていく作業はとても時間がかかります。地元の教室では親子で参加したり、夫婦や友達同士で参加したり年齢層も様々ですがみんな同じ目標に向かうことでとても良いコミュニティーの場となっています。毎日顔を合わせのお茶飲み仲間ができたとの声もいただきます。

また何度も教室に参加した方が先生となり、今では20名もの先生がプロジェクトを支えています。東京表参道の教室では3年前からネスバス新潟館で教室を行い、東京在住で巻出身の方や伝統文化に興味のある若者の参加が増えています。小学校の教室は後継者を育てるためにもとても重要なことだと思っています。

鯛車ワークショップ（巻）



鯛車ワークショップ（表参道）

■ ティファニー財団賞について

ティファニー財団賞とは日本国際交流センターと米国のティファニー財団が2007年に創設し「日本の伝統を現代に生かし地域社会の再生をはかろうとする団体」を表彰するものです。私たち鯛車復活プロジェクトは2011年の第4回受賞団体として「ティファニー財団賞伝統文化振興賞」を受賞しました。これは私1人の力ではなく、鯛車に関わった全ての人たちに贈られた賞だと思っています。審査員である法政大学の田中優子教授からは、東日本大震災を経験した2011年度は、盆行事に先祖の魂を迎える鯛車は、地域の振興と亡くなられた方々や被災された方々への祈りを象徴する文化にふさわしいとの評価をいただきました。また、東京藝術大学の日比野克彦教授からは長岡造形大学についても触れていただき、世界へ向けての人材育成だけでなく、地域文化を見直していくという大学の姿勢も評価いただきました。



2011年7月に工房を併設した鯛車のギャラリー「鯛の蔵」が新潟市巻地区にオープン

鯛車復活プロジェクトホームページ

野口さんが活動をしている「鯛車復活プロジェクト」の詳しい内容はこちらのホームページからご覧ください。日々の活動内容やイベント情報などもブログでチェックできます。

鯛車復活プロジェクトホームページ URL
<http://www.taiguruma.com/>

鯛車復活プロジェクトブログ URL
<http://taiguruma.blogspot.com/>



Made in Hasugata

今年の卒業・修了研究展のポスターのモチーフは、蓮根を中心とした野菜の輪切りです。1年生の細密描写の授業を受けた卒業生や在校生は、この課題にいろいろな思い出があるのではないのでしょうか。この授業の指導をしている時、私自身、あらためて野菜の形の面白さを再認識しました。今年のテーマは、もしも海外の有名な美術館でNIDの卒研展を開催するとしたらどんなデザインのポスターになるのか。ここしばらく続いた「パッと見て分かる」デザインの卒研展ポスターではなく、「何だかわかんないけどなんか面白い」デザインを目指しました。メディア毎に種類は異なり、皆さんのお手元へのビジュアルが届くか楽しみに。

(アートディレクション/デザイン：吉川賢一郎 准教授 アートワーク/御法川哲郎 准教授)



ご報告：昨年（2011年）の卒業・修了研究展のポスターは、2011年5月に行われた東京アートディレクターズクラブ審査会ポスター部門で入選（年鑑掲載）、2011年7月に行われた新潟アートディレクターズクラブ審査会で審査員特別賞浅葉克己賞（兼ADC賞ノミネート/年鑑掲載）を受賞しました。

卒業・修了研究展

日時：2012年2月10日（金）～13日（月）10:00～18:00（最終日は15:00終了）

会場：長岡造形大学 入場無料

作品を眺めながらキャンパスを歩く…だけではつまらない。

この作品はどのような意図があって創作したものか？ どういったアイデアが詰まっているか？

対話をすることで見えてくる様々な“カタチ”を楽しんでください。（交替制ですが学生が作品の近くにいます）

学部生にとって4年間の研究の成果を発表する、最大のイベント「卒業・修了研究展」。

学生の個性溢れる作品にぜひ注目してください。

今年度も第3アトリエ棟を使用し、ゆったりとした展示になっています。

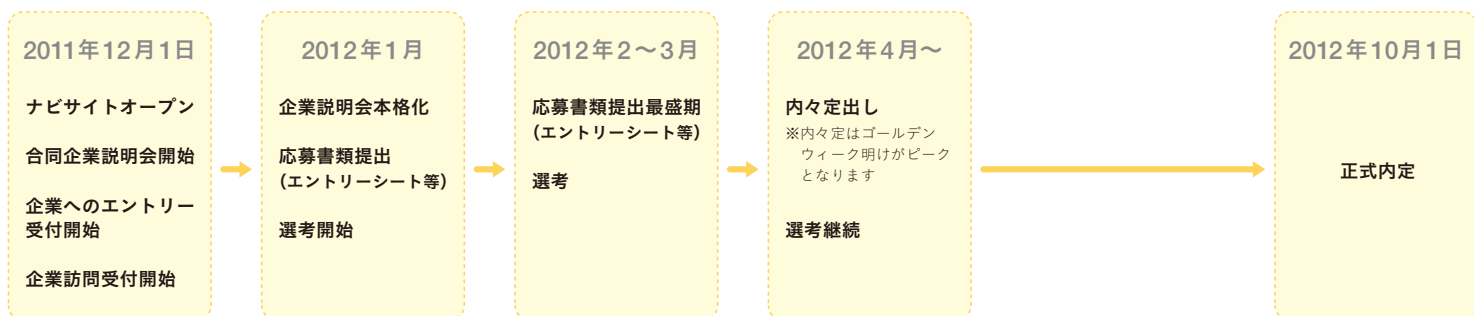


2011 プレイバック

※昨年度の様子です

2012年 就職活動スケジュール

現在の3年生から大学生の就職活動スケジュールが変わりました。日本経団連の倫理憲章で、採用広報活動の開始時期が昨年までの10月1日から2ヶ月後ろ倒しになったのです。この影響を受けて、リクナビ、マイナビなどの多くの新卒求人ナビサイトでのエントリー受付開始が12月1日となりました。2013年3月卒の就職活動スケジュールは概ね以下のように進むと見通されます。



以上のスケジュールのうち1月以降については2012年3月卒のスケジュールと全く変わりません。この結果予想されるのが就職活動の短期決戦化です。期間が短いため多くの企業の説明会や選考日程が重なり、学生としては応募の時点から選択を迫られることになるでしょう。企業説明会で話を聞いてから応募するか検討してみる、就職活動をしながら自分の志望を固めていくといったことが難しくなっています。

卒業生との座談会

上記の変化に対応するため、本学では2年生後期、3年生前期のキャリア教育科目に引き続き、3年生対象進路面談、筆記試験・ポートフォリオ作成・就職活動スキル等の各種対策講座、卒業生との座談会などを行っています。これらのプログラムにより、就職意識を喚起し、就職活動に必要な準備を十分にすすめていくよう働きかけています。加えて、学内合同企業説明会は回数を増やして開催し、より多くのチャンスを提供してまいります。

特に卒業生との座談会は、各業界で活躍する先輩の生の声を聞くことができる貴重な機会です。これまで、雑誌のアートディレクター、アニメーター、フリーランスの造形作家、WEBデザイナー、パッケージ提案営業のお

話を伺いました。協力してくれた卒業生の「後輩のために役立ちたい」という熱い思いが伝わる場となっています。

参加した学生からも「人とのつながりが大切だと身にしました」「仕事に対するイメージが変わった」「なんでもやってみることが必要と感じた」「将来に対して漠然とした不安を抱いていたがよい刺激になった」などの感想が寄せられ、刺激を受けている様子が感じられます。

今後も、たくさんの業種・職種で開催していきたいと考えています。ご協力いただける卒業生がいらっしゃいましたら、是非、就職進路開発センターまでご連絡ください。どうぞよろしくお願いいたします。



絵を描きながら解説するアニメ作画監督の坂田さん

長岡造形大学就職進路開発センター
 Tel : 0258-21-3341
 E-mail : shushoku@nagaoka-id.ac.jp

保護者ガイダンスを実施しました

9月11日(日) 保護者ガイダンスを実施しました。126名のご参加を得て、カリキュラムや成績表の見方、就職状況や就職活動支援体制の説明などを行いました。



学内合同企業説明会を開催します

12月27日(火)の第1回学内合同企業説明会に続き、1月30日(月)に第2回学内合同企業説明会を開催します。本学学生を積極採用する企業が集まる貴重な機会です。多くの3年生の参加を期待します。

Information

NID 実習体験

長岡造形大学では高校生の皆さんに大学に来ていただいて、様々な制作実習を体験してもらったり、普段あまり見る機会のない工房やアトリエ、スタジオなどをキャンパスツアーを通して紹介しています。

当日のプログラム例

- 1 大学紹介
- 2 キャンパスツアー
- 3 学内ワークショップ
 - ガラス
 - 染色
 - 鍛金
 - 写真 etc.

Fun to Design!



制作した作品は持ち帰りができます。

高校生アンケート結果より（抜粋）

- 学生さんがすごく詳しく教えてくれて楽しかった。トンボ玉とかまたやってみたい。（ガラス）
- スタジオで本格的に写真を撮ったのは初めてでした。（写真）
- 高校では体験できないことが体験できてよかったです。（鍛金）
- 設備や建物の作りが良いなと思いました。ガラスについての興味が以前と比べて増えました。（ガラス）
- 実習をすることが大学を知る上で一番わかりやすい。（鍛金）

● ワークショップ一例：ほかにもイラストレーションやアニメーション制作など多様なプログラムが可能です

トンボ玉を制作して携帯ストラップを作ろう

ガラス

内容：バーナーワーク技法でトンボ玉を制作しオリジナルのストラップを作ります。



根付（ネツケ）を作ろう

鍛金

内容：鍛金技法で真鍮板を加工し根付を制作します。



一眼レフを使って好きなものを撮ってみよう

写真

内容：実際にライティングし、デジタル一眼レフカメラを使って撮影。露出補正についても学びます。



今年度は、糸魚川高等学校、糸魚川白嶺高等学校（以上、新潟県）、富山第一高等学校、高岡龍谷高等学校（以上、富山県）、白田高等学校（長野県）の生徒の皆さんからご参加いただきました。

高校生の皆さん！
大学に来てみませんか？

実習体験受付中！

長岡造形大学では高校単位の学内実習を随時受け付けています。クラスや美術部での申し込み、他の高校との合同参加などお待ちしております。

キャンパスツアーでは普段の高校生活ではあまり見る機会のない様々な工房やアトリエ、スタジオ、デザイン教育の教材となるように建てられた本学の校舎を見学いただけます。また、タイミングが合えば授業見学も可能です。

大学での実習経験は皆さんの創作意欲を刺激するハズ。“ぜひ大学に行ってみよう”と思った方は高校の先生に相談してください。



「iPhoneアプリをつくってみよう」（デジタル）



「カラフルスタンプ染」（染色）

お申込方法

参加を希望する先生は、個別に日程等を調整させていただきますので長岡造形大学 入試広報課までご連絡ください。

TEL:0258-21-3331 E-mail:nyushi@nagaoka-id.ac.jp